創業60年記念
わたしが読んだ童心社の本

「だじゃれ」精神が光る絵本

岩間建亜

いわま　たけつぐ／クレヨンハウス副社長、子どもの文化普及協会取締役。雑誌『月刊クーヨン』や『月刊子ども論』の編集長を歴任し、多くの絵本の編集や子ども向け楽曲の制作・出版に携わる。

中川ひろたか／文　村上康成／絵

中川ひろたかさん。ここのところ、ちょっとお会いしていませんね。お元気ですか。三十年くらい前は、昼と無く夜と無く、毎日お会いしていたんじゃないかなあ。酒と音楽の日々、がなつかしい。

さて、『さつまのおいも』について。

あの鮮やかな絵本デビューを忘れていません。黄色い表紙にウィンクするさつまいも、そして「さつまのおいも」という筆文字の赤いレタリングが鮮烈だった。中川ひろたかさんというと、この表紙がすぐ思い浮かぶほど印象が強い。

「小学校五年生のときに、だじゃれで食べていきたいと思った」と何度か聞いていたから、これはオナラの絵本だ！　と直感したほどだ。さつまいもだし、黄色いし。

ところがなかなかオナラにならない。土の中で暮らす、さつまいも一家が筋トレしている話だ。品がいいのは、村上康成さんの絵のせいで、中川さんのせいではないだろう。もっとコテコテのだじゃれがきつい、笑うまでだじゃれこいたる！　みたいなあの中川ひろたかさんじゃない。

とはいえ、のどかな展開に、じゅうぶんにサービス精神が盛り込まれている感じがある。エンターテイナー中川さんの指南か、村上さんの絵におかしみがずっと漂っている。さつまいも一家の食事をしたあとの歯磨き、便秘模様のトイレや艶っぽい母子のお風呂姿、トレーニング姿やみんなの見る夢……。

ところが畑に子どもたちがやってきた。このシーンがいい！　うろこ雲やホバーリングするトリ（村上さん真骨頂！）にうっとりする。さつまいも一家と子どもたちのつなひきがはじまる（だから筋トレしてたんだよね）。

スッポーン！　「わたしたちの　まけで　ごわす」負けたくせに居直るさつまいも一家。「ほうさくだ　ほうさくだ」「ほうねん　まんさくだ」焚き火をして焼きいも大会。「ほくほく　おいしい」「あまくて　おいしい」「いっぱい　いっぱい　たべました」から（でました！　オナラ！　やっぱり！）「そしたら　プーッ　あっちで　プーッ　こっちで　プーッ」「くさーい」「くさーい」さつまいもの大将！　「はっ　はっ　はっ　わたしたちの　かちで　ごわす」（薩摩のおいも、薩摩弁で勝利宣言）。

癒し系というか自然派の村上さんと組んだのは、中川さんのセンスか、編集者のセンスか？　この絶妙とも言うべき組み合わせから生まれたこの絵本での絵本作家デビュー以来、中川さんは二十年以上多作で作り続けていまや、堂々たる絵本作家だ。明るくてわかりやすい絵本には、保育士の経験や、シンガーソングライターのキャリアが生きている。クレヨンハウスでは、作詞家・新沢としひこさんとのコンビで百の歌を作曲してもらっている。どの歌も、いまも全国の幼保の現場でうたわれる名作。作曲家として大成し、絵本作家として大成してきた多才な中川さんが、次に大成するのはどの分野か。たのしみだ。次は「だじゃれ作家」か！